論文要約

後期アウグスティヌス思想における神と人間の関係論

平野和歌子

本論文は、アウグスティヌスの後期思想において、神と人間の関係に関する諸理論が、一つの体系を成す仕方で論考されているのではないかとの仮説に基づき、その体系を解明することを目的としている。

アウグスティヌスの後期思想の体系は、キリスト教思想にとって重要な諸理論の中でも、主に三位一体論、創造論、原罪と自由意志の論点を扱う救済論によって構成される。これら三つの理論は、複数の著作や様々な論争の場面で論じられているが、どれも共通して、神と人間の関係を扱うという特徴がある。三位一体論では、神自身に内在する関係、すなわち御父と御子と聖霊の一性やペルソナの区別が問題になる。創造論と救済論では、神が人間たちといかに関係して、創造や救済を実現するのかが問われている。アウグスティヌスは、これらの三つの理論それぞれにおいて個別に、三位一体の関係や神と人間の関係について論考を深めると同時に、全体として一つの体系を構築しようしていると考えられる。そこで本論文では、三つの理論の体系を解明することを目指すとともに、それを構成する各理論に関しても、アウグスティヌスが後期にいかなる見解へと至っていたのかを明らかにしている。

事実、三位一体論、創造論、救済論に関して各論ごとには膨大な先行研究の蓄積があるが、これらの理論同士がいかに関連するのかは十分に検討されておらず、思想の体系を見通すことができていない。それゆえ、これまで各理論に対しても、どのような思想の体系の中でその理論に至ったのかが把握されずに、一面だけを見て否定的な評価が与えられることがあった。代表的には、アウグスティヌスの三位一体論に対して Théodore de Régnon が与えた枠組みに基づく、根強い批判がある。de Régnon の説によれば、西方教会では教父時代からスコラ時代まで、神の本質（実体）における一性の方がペルソナの区別を凌駕してしまう。このように三位一体の一性を強調しすぎる教義理解へと最初に方向づけた張本人こそ、アウグスティヌスであるとされる。しかし、主著の『三位一体論』に限定せず、

後期著作を広く精査すれば、アウグスティヌスがこの批判に耐えうるような思想体系の中で、三位一体を論じようとしていることが窺える。特にアウグスティヌスが死の約二、三年前にアレイオス派の司教マクシミヌスと論争した際に、三位一体論への論考を深めた可能性がある。しかし先行研究の状況では、マクシミヌス論争についての研究は、『三位一体論』の研究に比べて明らかに進んでいない。そのため本論文では、マクシミヌス論争を含めて広く精査することで、アウグスティヌスの三位一体論が、一性だけでなくペルソナの関係性を等閑視しない側面から見直されるための、わずかな足掛かりを提供している。また、キリストは受肉した御子であるため、キリスト論は三位一体論と強い関連性を有するはずである。しかし一部の研究者らからは、アウグスティヌスは三位一体論とキリスト論との間を整合的に埋めうるような理論的な枠組みを見出せなかった、との指摘がなされることがある。本論文はその指摘に対しても、異なる見解を提示しようとしている。マクシミヌス論争の時期には、アウグスティヌスは三位一体論を論じる際にも、キリスト論を射程に入れていると考えられる。

三つの理論のうち、三位一体論研究の進展に伴い、創造論と救済論についての研究も後押しされ、進むことになる。本論文で各理論を精査した結果からも、神自身に関する三位一体論を前提として、そのうえで神と人間との関係論の領域である、創造論と救済論が論考されていると言える。三位一体の神に内在するペルソナ同士の関係を基盤として、創造や救済における神と人間との関係が、三位一体論と整合性を保つようにして考えられているのである。創造論において、アウグスティヌスの主要な試みは「創世記」冒頭の解釈であり、彼は生涯で四つの著作の中で創世記解釈を行っている。その中でも、比較的後年に著された『創世記逐語注解』では、最も詳細な解釈がなされている。救済論に関しては、原罪と自由意志との関係が争点となった、ペラギウス派論争の影響が強い。とりわけエクラヌムの司教ユリアヌスは、アウグスティヌスの晩年に論争相手となり、老年のアウグスティヌスに対して知的な刺激を大いに与えている。深い聖書解釈やペラギウス派のユリアヌスとの活発な論争を通して、アウグスティヌスはさらに緻密な思想体系の構築を推し進めることができたと考えられる。そこで本論文では、『創世記逐語注解』と『ユリアヌス批判』『未完のユリアヌス批判』に焦点を当てている。これらの考察から明確になる通り、アウグスティヌスは創造論と救済論を論じる際、神と人間との間の媒介者であるキリストの役割や位置づけを、常に

念頭に置いている。アウグスティヌスが六十代をむかえる 411 年以降に「キリストの一なるペルソナ（una persona Christi）」という表現を使用し始め、神と人間が関係するための中心点として、キリストを益々重視するようになったことは、研究者の間で既に共通認識となっている。そのうえで本論文では、晩年の時期には、創造論と救済論にもキリストについての理解が反映されており、キリスト論と矛盾しないような理論が展開されることを指摘している。つまり、上述の通り、マクシミヌスとの論争等を通して三位一体論とキリスト論に整合的な枠組みが築かれつつあるなか、創造論と救済論もまた三位一体論を前提とするだけでなく、キリスト論とも適合する理論として成立しているのである。

このように本論文では、三位一体論、創造論、原罪と自由意志の論点を扱う救済論が、アウグスティヌスの後期思想において体系化していくと同時に、各理論の論考も進展することを明らかにしようと試みている。その目的の達成のため、本論文の構成は、各章で三つの理論をそれぞれ取り上げるかたちになっている。第 1 章と第 2 章では、三位一体論を検討した。具体的には、第 1 章で三位一体を本質的（実体的）な一性の観点から、第 2 章では三つのペルソナ同士の関係の観点から吟味した。第 1 章と第 2 章の三位一体論を前提として、第 3 章では『創世記逐語注解』に基づき創造論を検討し、第 4 章ではペラギウス派のユリアヌスとの論争を扱いながら救済論を検討した。その結果、創造論と救済論がキリスト論と関連することが明らかになる。そのため最後に第 5 章では、第 1 章で取り上げたアレイオス派のマクシミヌスとの論争へと戻り、キリスト論を検討した。各章について詳説すれば、アウグスティヌスの後期思想では、以下のような特徴的な論考がなされている。

第 1 章の考察によれば、アレイオス派のマクシミヌスは、御父と御子の関係について従属主義を採り、御父と御子の間に意志的一致しか認めていない。マクシミヌス論争に際してアウグスティヌスは聖書解釈に基づき、複数のものが一致もしくは一性を有する形式を、三つに分類している（本論文では【I－1】【II－1】【I－2】と表記）。これらの形式の吟味によって、神の三位一体において本質的（実体的）な一性は、どのような形式で成立するのかが特定される。第一の形式【I－1】は、異なる実体について「一なる何か」が付加される場合である。「一なる何か」は、二つ以上の複数のものを包括的に括り、一つにする機能を有している。これによって、包括される複数のものが何らかの点で異なる場合には、複数のも

のは相互に相違したまま、「一なる何か」に関しては一致している状態になる。【I－1】の事例として、神や人間たちなど複数の実体が意志的に一致する状態、もしくは、魂と身体という二つの実体から一人の人間が成る場合が挙げられる。マクシミヌスは、御父と御子の関係に【I－1】を適用し、二者の意志的一致を主張していることになる。第二の形式【II－1】は、一なる実体に属するものついて「一なる何か」が付加されない場合である。これは、同じ本質（本性）のもの同士の一致の形式である。そのため、御父と御子と聖霊という同じ本質（実体）のペルソナの一致を説明しうるが、同様に人間たち同士の人間性の一致にも当てはまるため、神に特有の一性を十分には説明できていない。第三の形式【I－2】は、一なる実体に属するものについて「一なる何か」が付加される場合であり、神の本質的（実体的）な一性に適切な形式である。【I－2】は、『三位一体論』と基本的には同じ方針で考えられる。それによれば、「御父は神である（御父=神、神的実体）」「御子=神、神的実体」「聖霊=神、神的実体」であり、「一なる何か」が付加されることで、三位一体の本質的（実体的）な一性が成立する。この場合の「一なる何か」は、神的実体、善や全能等の神的属性、「ペルソナであること」である。ただしマクシミヌスとの論争時には『三位一体論』とは異なり、三つの形式が提示されるところに特徴がある。特に【I－2】の形式は、三位一体論だけでなく、キリスト論とも整合的に論じられる。三つのペルソナの本質的（実体的）な一性と類比して、第二位格のうちでは、御子の神性とキリストの神性に一致があるとされる。

第２章では、ペルソナの関係について、アウグスティヌスは「所有」に着眼して論考する。ペルソナ同士の間には、二種類の所有の関係がある。第一に、「御父‐御子‐聖霊」の形式で、ペルソナが相互に所有し合う、並列の関係がある。第二に、「御父⇄すべてのもの⇄御子」の形式で、ペルソナが所有するすべてのものを共有し合う関係がある。これらの形式は、三位一体の内部の御父と御子の関係だけでなく、父なる神とキリストの関係にも適用できる。ただしキリストによる所有は、受肉時にはじめて成立するため、三位一体論とキリスト論には隔たりが存在しないわけではない。アウグスティヌスはこの隔たりを、予定説によって埋めている。また、アウグスティヌスはキリストの所有するものの中でも、権能（能力）の所有を重視する。キリストの権能（能力）には、二種類ある。すなわち、複数の人間たちを所有できる支配力と、意志の通りに働きを実現できる能力であ

る。この権能（能力）によって、キリストは人間たちの救いの範型として働くとされる。第三位格の聖霊は、人間たちに対して、与えられる賜物である。聖霊の固有な働きによって、神と人間との間や人間たち同士の間に、愛の関係が成立する。このようにアウグスティヌスは、各ペルソナが固有の位置づけを保持したうえで関係し合う形式を考えており、de Régnon の説を見直しうる可能性がある。

第 3 章での『創世記逐語注解』の解釈によれば、創造の前段階で、三位一体の御子（御言葉）において、すべての創造の計画が立てられている。そして計画は二段階の創造によって、この世界で実現される。第一の創造では、動植物は種ごとに種子的理拠の状態で造られ、第二の創造で、その種子から個体が造られる。ただし第二の創造時に、第一の創造による種子的理拠から、神の関与なく自然発生的に個体が生じるのではない。むしろ第二の創造時にも、神は二つの神的摂理を通して、すべての個体に関わっている。一つ目の自然本性的・内的摂理は、個体を種子的理拠のプログラムの通りに生育させる。加えて二つ目の意志的・外的摂理は、天使や人間を介して外から個体に働きかけ、個体に種子的理拠のプログラム以上の多様性を生じさせる。さらに意志的・外的摂理によって、奇跡の発生も説明される。ただアウグスティヌスは、この摂理が御子の受肉を実現する働きとは考えないところに留意すべきである。御子の受肉以外の様々な神の顕現や奇跡は、特別な事態ではあるが、意志的・外的摂理によって説明される。しかしアレイオス派は、本論文第 1 章での考察の通り、アウグスティヌスとは異なる仕方で御子（キリスト）を捉えるため、受肉とその他の奇跡との違いを認識できていない。このような留意に、キリスト論と創造論との関連づけが窺える。

第 4 章によれば、アウグスティヌスとペラギウス派のユリアヌスは、原罪と自由意志について見解を違えている。ユリアヌスは原罪を認めず、次のように主張する。アダムの創造時と同様に、人間の意志はいかなる妨げも受けず、自由に選択できる。つまり自由の意味は、意志の自由な選択の可能性と同一視されている。この場合、すべての人間は個々の責任で神と関係するという、いわば一次元の構造が考えられている。それに対してアウグスティヌスは、原罪論を支持し、アダムの罪の罰として、子孫は欠陥ある第二の本性を備えることになったと考える。第二の本性の状態では、自由意志は、身体的な欲望によって自由な選択を妨げられている。このような現状の考慮により、人間の状態は三つに区別される。アダムの創造時の状態［A］、原罪を負う人間たちの第二の本性の状態［B］、終末時

に一部の人間が到達できる、キリストの状態［C］である。それゆえ自由の意味も、アウグスティヌスはユリアヌスとは異なる理解をしている。一つ目の意味は、第二の本性の状態［B］からキリストの状態［C］への解放が、自由として理解される。二つ目には、キリストのように、意志と能力とが一致し、常に意志通りの行為が実現できる状態に、真の自由が認められている。ここで能力の観点に注目される際、本論文第 2 章で考察した、キリストの権能（能力）についての理解が前提になっている。また、ユリアヌスは神と人間の関係が個人ごとに生じると捉えているが、アウグスティヌスはキリストが救われるべき人間全体の範型であると考えている。

第 5 章では、ここまでの考察に基づき、範型としてのキリストを媒介として、最終的に神と人間との間にどのような一致が実現するのかを明らかにした。マクシミヌスは御父と御子（キリスト）に意志的一致しか認めず、人間的魂を欠いたキリスト論を主張していた。その結果、人間たちと父なる神との関係は、unum を合意と捉えたうえで、「homines sunt unum cum Patre et Filio」の形式で表された。アウグスティヌスは、「ヨハネによる福音書」第 17 章の解釈に即して、範型のキリストが御父に人間たちの救済を懇願することで、人間らも父なる神と実体的に関係できる可能性があると考えている。その形式は、「Christus vult homines in Patre et Filio cum Christo unum/umus erunt」と表される。一連の論考において、アウグスティヌスは属性の交わりを考慮しており、そこに後期思想におけるキリスト論の深まりを認めることができる。

本論文での以上の考察から、アウグスティヌスの後期思想において、様々な論争等が契機となって、諸理論の整合的な体系が築き上げられたと結論づけられる。アウグスティヌスは生涯を通して、キリスト教の重要な諸理論に関して、緻密な論考を続けている。まさにその成果として、後期思想には、特徴的な考え方や思想の体系化が認められるのである。